

## 平成27年9月関東・東北豪雨災害

平成27年9月9日から11日に関東と東北で発生した台風18号による豪雨災害

- ・死者8名、重傷者7名、軽傷者39名
- ・浸水域は最大約40km<sup>2</sup>（常総市など）。床上浸水の被害は約4700棟
- ・茨城県内の避難所数及び避難者数（9月10日19時20分現在）  
176箇所 10,272人（うち常総市は、26箇所 3,804人）
- ・茨城、栃木、宮城3県の避難者数 5,618名（9月12日時点）

### 茨城県薬剤師会副会長 増田道雄氏からの情報提供（H27.9.22）

増田道雄氏；茨城県薬剤師会副会長（常総薬剤師会所属）

日本災害医療薬剤師学会副会長

#### 【被害の状況】

- ・被災地は鬼怒川の東岸にあたる常総市が中心で、鬼怒川の越水と決壊による水害。
- ・被災地の多くが穀倉地帯で、刈取り前の稲が、水没により、ほぼ全滅状態。
- ・一時は7m程の浸水があり、家屋の流失、長時間にわたる冠水で、なかなか被災地に入ることができなかった。
- ・被災した薬局は、常総市石下地区、水海道地区で十数件にのぼり、薬局の中はヘドロだらけだった。レセコンのデータを抜きに行ったが、増水が早くて回収できず、隣家の屋根からボートで救助されたケースもあった。

#### 【災害対応】

##### ■9月10日（木）13時

- ・茨城県薬剤師会災害対策本部立ち上げ。

##### ■9月11日（金）18時

- ・JMAT茨城（4師会）緊急会議。災害対応決定。

##### ■9月12日（土）

- ・筑波大学附属病院内にJMAT茨城現地対策本部開設（8時）。参集、活動開始。
- ・JMAT5チーム、日赤3チーム、現地に向け出動。
- ・DMAT（この時点で、県内外80名ほどで活動）からの引き継ぎ。DMATは撤収。DMATチームから称賛の声が上がる程の見事な、短時間引き継ぎだった。
- ・必要資材、医薬品、人員等の調達、現地情報収集・整理。避難所・巡回診療、本部機能の充

JMAT茨城対策本部は、11日に立ち上げましたが、現地対策本部は、12日の8時、開設です。

実。対策本部の壁、20m程にびっしり情報整理（地図、被災情報、道路情報、出動チーム情報、行政、4師会、参加スタッフの各種連絡先、避難所情報等）。教科書通りの本部立ち上げ完了。

- ・30 避難所 避難者；3,433名 診療；115名 発行処方箋；120枚

### ■9月13日（日）

- ・避難所に巡回診療、衛生指導。
- ・28 避難所 避難者；2,825名 診療；118名 発行処方箋；49枚
- ・仮設診療所開設
- ・災害対策本部を、つくば保健所に移動（20時）

「心ヘルス」を「メンタルヘルス」と表記しても差し支えないでしょうか？ 茨城県立こころの医療センターが担当

### ■9月14日（月）

- ・避難所に巡回診療、衛生指導。
- ・リハビリ、鍼灸士会、栄養士会、心ヘルス、他3団体も加わる。
- ・26 避難所 避難者；未集計 診療；未集計 発行処方箋；49枚
- ・仮設診療所 1か所追加（計2か所）

集計ができていたようでしたら、データをお示しいただけないでしょうか

### ■9月17日（木）

- ・地元の医療機関の再開により、一部の医療機関を除き応需体制が整いつつある。避難所等への医療支援のニーズも減少し、JMAT茨城の対策本部を閉鎖。

### ■9月20日（日）及び21日（月）

- ・常総市からの委託を受けて、茨城県薬剤師会が消毒薬の配布と使い方の啓蒙を実施。

### 【茨城県薬剤師会】

- ・医療チームへの携行薬のセット、処方箋の回収、写メールによる伝送、調剤、配達、応需薬局の情報収集・伝達、DM検査キット調達、避難所衛生状態調査、医療チームへの帯同、医師への助言、薬の鑑定等を行った。
- ・東日本大震災の時と同様に、薬剤師の活動は、医療チームからの高い評価をいただいた。
- ・茨城県薬は災害支援への関心度が高く、今回も早くから災害ボランティア登録が行われ、被災地への派遣も積極的に行われた。

発足したと云う事もあり、関係者間の顔が見えていて、連携がスムーズであった。

JMAT出動と云う事では、職場の長などの許可や、仕事の調整などに時間を要す為。

### 【JMAT】

- ・JMATから県庁へ各医療機関に出動要請を出してもらい、各医療機関の院長等からの出動命令が出たため、スムーズに隊員の招集ができた。
- ・JMAT茨城は、昨年、4師会（医、歯、薬、看）により発足し、研修や訓練なども行き、準備万端の状態にあった。手前味噌だが、研修や訓練で行った内容よりも、もっと高度の対策本部の立ち上げをすることができた。
- ・連日、早朝から深夜まで、物資の集め、装備品の準備、受入れ薬局の調整、資

国立水戸医療センターの救急救命センター長 安田 貢 医師（DMAT、Dr.ヘリ担当）の力が大きい。災害関係者との顔が広く、JMAT、DMAT、4師会、行政、とのコーディネートがスムーズに行えた。茨城県の医療コーディネーターは、全国で一番遅く（今年6月）指名された。安田医師の人望、カリスマ性が、医療コーディネーターとしての成果を上げたものと思われる。（私の私見：今迄の災害時には、災害好きのDMATの残党が何時までも残っているが、今回、安田医師によるJMATの完璧な対策本部の立ち上げを見て、『素晴らしい！』と云って撒収して行った。）

常総市からの委託を受けて、茨城県薬剤師会が、水没地域への消毒薬の配布と使用法の説明に行った。(9月21日～22日) 地区・人数

### 【今後について】

- ・被災家屋の泥かき・消毒と、避難所の公衆衛生の確保が課題となっているが、ライフラインの回復に伴い、改善が進むものと考えられる。
- ・各避難所には保健師が配置されているため、公衆衛生関連の課題に対する連携を検討中。

### 【増田道雄先生より】

- ・今回の災害を地元被災者の立場と支援者の立場で経験したが、東日本大震災以降、災害に対する支援体制が充実してきていることを実感した。また、その支援も、各チームが共通言語の下、連携し、スムーズな支援になっていた。現在、日本災害医療薬剤師学会が行っている災害支援薬剤師の養成は、必ずや災害支援にとっての基本となるものと確信している。

医薬品リスト、使用量、人数アポ

### (参考) H27. 9. 13 朝日新聞デジタル記事

北関東、東北を中心とした豪雨災害では、多くの方が自宅に戻れていない。避難所では、薬不足や衛生面への不安が出始めた。多くの関係機関による救助、搜索活動も続く。過去の大規模災害の教訓は生かされているのか。

#### 各地で記録的大雨

5千人以上が避難を続ける茨城県常総市では、避難生活の長期化への懸念も出始めている。「脳卒中の危険があります。とりあえず4日分の薬を出しますね」

約600人が避難する石下総合体育館で12日午後、日本赤十字社埼玉県支部から派遣された五木田昌士医師(37)が、男性の相談に乗っていた。4年前から血圧を下げる薬を飲んでいるが、自宅が浸水して取りに行けなくなったという。五木田さんは「急な避難で持病用の薬を家に置いてきた人が多い。今後、体の不調を訴える人が増えるかもしれない」と心配する。浸水で被害を受けた薬局や医院も多く、薬の調達は進んでいないという。

同じく日本赤十字社千葉県支部から派遣された篠崎夏樹医師(41)もこの日、2時間半かけて避難所を回り約20人を診察したが、薬不足に危機感を募らせる。「持病のある人が多い。薬が安定的に供給できないと、症状を悪化させる人が出る危険性がある」。300人の3日間の薬を用意して現地入りしたが、脳梗塞(こうそく)など重篤な病を患った人の処置はできなかった。